

徳川家光

徳川家光（1604～1651年）は徳川家の第3代将軍であり、その治世のもとで日本は群雄割拠の分裂した国から、列島の4つの主な島のうちの3島を統一した政治体制の国へと変わった。家光は、応仁の乱（1467～1477年）の際の火災で破壊された仁和寺の再建を許可し、資金を提供したという点で、仁和寺の歴史においても重要な役割を果たした。史実によると、家光が1634年に京都を訪れた際、仁和寺の僧の覚深が将軍に謁見を願い出て、仁和寺の再建を請願した。覚深は、多くの僧侶とは異なる特別な立場にあった。彼は皇室の直系の子孫だったのだ。皇室の血筋を引く仁和寺の僧侶は彼の以前にもいたが、覚深ほどに仁和寺にとって重要な僧侶は他にはいなかった。彼がいなければ、1640年から1646年にかけて行われることになる再建に必要な資金は調達できなかったかもしれない。今日、仁和寺の伽藍に立っている建物の大半はこの再建時に、家光の後援を受けて建てられたものである。